
好きということ

山子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きということ

【Nコード】

N5418H

【作者名】

山子

【あらすじ】

コンプレックス持ちだった、恋したり楽しい日常を送るのです！あのイケメンが…私を好き！？泣いたり笑ったり、ドギマギしたり…ネガティブ思考の私を振り回すあの人の本当の気持ちを知りたい！ちょっと逆ハー気味で、地味かつ太めの女の子と掴み所のない美形な男との全然釣合いの取れないラブストーリー！。高校生×高校生男女ラブストーリーー

【1】山本千宙（やまもとちひろ）（前書き）

ゆっくり更新予定です。気長に読み進めてください。

感想なんぞ宜しくお願い致します！

もしかすると、15禁があるやも・・・まだ、分かりません！！

それでは、『好きということ』、どうぞ

【1】山本千宙（やまもとちひろ）

とっても素敵な男の人と恋愛するのは、決まって容姿のキレイな女の子だと相場で決まっている。

たまには、奇跡的に10人並の女の子がハッピーエンドを迎える場合があるが、それは大抵、その子は痩せてたり、スタイルが良かったりと何かしら秀でたものがあるのだ。

それが、漫画でも小説でも現実世界でも、覆す事のない事実だ。

6月――

高校に入って2年目の梅雨。

帰りのHRの時間に一昨日から読みかけの小説に目を落としていた山本千宙^{やまもとちひろ}は、知らず知らずに溜息を落とした。

「なに、ちいちゃん、溜息出てるよ」

前の席に座っていた高校に入ってから友達である磯辺文子^{いそへあや}が椅子に身体を預かる形で緩く振り返っていた。

長袖のブラウスを肘まで折り曲げ、そこから伸びている腕は少し日に焼けて黒いが、スラッとしていて、とても魅力的である。

色素の薄いショートの髪も軽くカールしていて、小鼻に小口、猫みたいな目をしている容姿は可愛い分類に入る女の子だろう。

ちなみに、文子の髪は天然パーマらしい。

その容姿を見て千宙は、目を据わらせて大きく溜息を付いた。

「なによー、人の顔見て」

「あー、ごめん。現実が一瞬憎くなったただけだから」
「何それ？」

きょんとした顔で文子が聞き返す。

千宙は、今の今まで読んでいた小説の表紙を文子に見せるように傾けてみせた。

そこには、キラッキラとした男女が中睦まじく描かれた、いかに

も『これは、恋愛小説です』と物語っているものだった。

その表紙を撫でながら苦笑してみせた。

「非現実でも現実でも少数派に入る私には無縁だなーって思ってただけ」

「ああ、これ読んでたんだ。人気だよね、これ。けど、何が少数派？」

千宙は、栞を丁寧に挟み、パタリと表紙を閉じた。

「地味のデブ・チビ・ブスを兼ね備えた私の事を少数派って言うの分かっていたが、自分で言ってる千宙は惨めな気持ちになった。

だが、冗談のように軽く言わないと自分の卑下する発言が癖みに聞こえてしまうだろうから、そこは軽く済ませる。

案の定、文子は気にも留めずに言い返してきた。

「うわー、なにそのネガ発言。ダイエットでもして痩せりゃ良いじゃない」

「そんな簡単に…言うだけは簡単よ！何回挑戦して脱落している事か」

「意志の弱い」

「むう」

図星を指された千宙は、机の上に顎を乗せてフニフニの頬を膨らませた。

そりゃあ、ダイエットが上手くいくなら頑張りたい。

中学校の頃から幾度と繰り返されいてるダイエットは成功した試しがない。

千宙は色白だが、肉に包まれた身体をしているし、身長も低いので余計にデブに見えるのが難だ。妊婦かと間違えられる高校2年生である。

「食べても太らない質の阿やが良いよ」

「ちいちゃんの場合は、ガッツリ食べちゃうからいけないの。少しの我慢と運動で痩せそうだけだなー」

「他人事だ」

「他人事だもん」

今度は、完全に机に突っ伏してイジケモードに入る。

その様子に今度は、文子が苦笑を漏らしセミロングの髪を下の方でダンゴにした千宙の頭をポンポンとした。

「ね、それよりさ帰りにどっか寄ってこよう」

突っ伏さしていた身体をガバリと上げて即答したが、今朝母親に言われたことを思い出した。

「うん…あ、駄目だ」

「なにかあるの？」

「ペットシヨップ行かなきゃならないの。ペペの缶詰とカリカリがなくなつてさ」

「わあ、ペペちゃん元気ー？」

ペペとは山本家の2歳になるブチ猫の事だ。乳飲み子から育てた千宙はペペを愛息子のように可愛がっている。無類の動物好きだ。

「朝の段階で缶詰がなかったから早く買って帰らなきゃ…お母さんがペペに襲われてるかもしれない」

「堪え性ないもんねー」

飢えたペペに遭遇した事のある文子がケラケラ笑う。

過保護に育てた猫は今や、王様猫に育ってしまったている。食べる欲求に我慢が聞かない所は飼い主ソックリだ。

「甘やかしたばかりに…」

「けど、他の躰はちゃんとしているよね。机に乗ったとこ見たことない」

「そこだけは厳しくしたからね」

「ペペちゃんだと、しょうがないか」

「うん、ごめん」

「許す」

【2】瀬木秋陽（せきあきひ）

「わ、ちいちゃん、見て見て！」

何も入っていないだろうペタンコの鞆を肩にかけた文子あやこがバンバンと千宙ちじろの肩を連打する。

痛い・・・

容赦のない叩きである。顔を好奇心に輝かせた文子は、それに気付く様子はない。

それよりも更に強力が増していつているようだ。手跡を覚悟していた方が良くかもしれない。

「イタ！イタタタ！分かったから！見るから！痛いって！」

文子と同じように薄い鞆を両手で盾代わりにして攻撃を阻止し、文子の方を見やる方を覗いた。

窓の外。

校門に向かう校庭のど真ん中に、それはいた。

瀬木秋陽。
せきあきひ

高3。黒髪を左右非対称にカットした髪型。毎日アレンジが違う。辺りお洒落だ。

身長は180を越えているという噂で、千宙との差は30センチあると予測される。

クッキリした二重、薄い唇に鼻筋の通った鼻と、完璧パーフェクトである。

そして、少しばかり醸し出される不思議オーラが色気を増長させていて、そこいらの美形芸能人を凌ぐと言われている学校1の有名な人だ。

有名と言われる所以は他にもある。

類は類を呼ぶ、という言葉があるように、彼の友人たちも世間が認める【いい男】揃いであるという事もそうだし、常に数人の女を

侍らせていて、下事情の噂が耐えないという事もあるに拍車をかけている要因だろう。

その秋陽が、いつものように数人の女と友人を伴って歩いている。
「瀬木先輩たち！今日も凄いハーレムだね！」

文子が窓枠に手をかけて身を乗り出す。落ちる気が。

千宙も校庭を歩く秋陽を見ながら、今日の女の数を無意識に数えた。

・・・2人。今日は少ない。

秋陽を入れて男4人で考えると彼女たちの方が逆ハーレムじゃないのかと思うが訂正はしない。

どうせ、これから増えるに決まっている。

「羨ましい・・・」

「ちいちゃん、心の声が漏れてるよ」

「だって、美形をあんなに間近で見れるなんて羨ましい限りだと思わない！？」

目の保養、心の潤い！と千宙は窓枠に縋り付く。

千宙は、無類の美形好きだ。現実だろうが、非現実だろうが関係ない。美形が大好きだ。

自分自身を棚にあげて理想が高いのは痛い人以外の何者でもない。
「思うけど、お近付きにはなりたくない人種だね。ハマった後が怖いそう」

「アヤはまだ、お近付きになる可能性があるけど、私は1%もないからさー、間近で垣間見るなんて奇跡に近い。なんか、瀬木先輩たちの視界に入るのが私は恐ろしいよ」

「なにそれッ」

文子がプツと吹き出す。千宙の真面目な発言を冗談に取ったようだ。

「真面目に言ったのに！」

「はいはい。ほら、先輩たち行っちゃったよ。私たちも帰る」

「秋、カラオケ行こうよー」

世間が言う「アゲハ嬢」と呼ばれるだろうド派手な女が秋陽の腕に絡み付いた。

制服に盛りメイクは似合わないが、彼女達にとっては最先端のメイクであり、ギャルの嗜みでもある。

秋陽は女の行動を気にも留めずに気だるく答えた。

「んー？」

つれない返事に女は絡めた腕に力を入れて自身の胸を腕に押し付け、媚びた眼差しを秋陽に向けた。

「秋が歌わないのは分かってるけど…いてくれるだけで良いから行こーよー」

「ね、学たちも良いでしょー」

別の女が、メンバー達に話を振る。秋陽が乗り気でなくとも他のメンバーが乗ってくれたら流れるにそのままカラオケに行く事になるのは今までの経験上で彼女達が勉強した事である。

「カラオケねー」

少し長めの襟足の髪を残し、ルーズにまとめた茶髪。身長は175くらいだろうか。

数箇所開けられているピアスをした大野学が、少し考えながら言

う。

「俺はいいよ」

学の隣にいたナチュラルブラウンの柔らかくウェーブのかかった髪。メンバーの中で一番可愛い顔立ちをしている男、光宗竜司みつむねりゅうじが賛成の意を唱えた。

「下手の横好き」

すぐさま、ボソリと学が呟いた。

「うつせ。好きなんだから良いだろ」

すぐに反応する辺り、自分の音痴加減を理解しているらしい。

その後ろを我関せずで歩いていた優等生然とした雰囲気きつたかのりの男、脇田孝典きたたかのりが、歩きながら読んでいた文庫本から顔を上げた。

フレームのない眼鏡が涼しい。短めにカットされた髪はワックスで空気を入れている。

「俺はどっちでも良い」

そう言うと、文庫本に視線を戻した。あまり興味がないようだ。

学は、秋陽の横で後ろ向き歩きをしている女の腕を引っ張り自分の胸に軽く抱き込んだ。

「俺としては、カラオケよりも良い所に行きたいな」

学の甘い口調に、抱き寄せられた女は期待の表情を見せる。

「学がそう言うなら良い所に行っても良いよ」

女は秋陽に絡み付いている女に視線を投げた。それまで食い下がっていたはずの女も態度を一変させて媚を更に含みだす。

「良い所なら、カラオケ行かなくても良いよ」。・・・秋陽ん家、連れて行ってよ」

「ちよつと、それだと2人ほど余るんですけどー」

竜司が唇を尖らせる。

「友達呼ぶよー、どんな娘こが良いー？」

携帯を取り出した女が竜司と孝典の方を向く。パチパチと操作する音が聞こえるのはメモリー確認をしているからだろ。

だが、それに答える前に遮る声があった。

「あ」

秋陽である。

「なに？」

突如、声を発した秋陽は絡み付いていた女は小首を傾げる。
それを無視する形で秋陽は、女を引き剥がし呟いた。

「俺、パス。用事出来たから」

【3】初めての邂逅

千宙^{ちひろ}は、商店街入り口で文子^{あやこ}と分かれた後、押して歩いていた自転車に跨ると品揃い豊富を謳っている行き付けのペットショップへ急いだ。6月の陽気は湿っぽくて、漕いでいる脚に汗が滲む。

なんとなく他の人より汗の量が多いような気がするが気にしない。気にしたら負けだ。

キキーツと音を鳴らして自転車を止めると、店舗にピツチリと寄り添わせて止める。そして、鞆から財布だけを取り出して店に入った。

涼しい。薄っすら搔いていた汗が急速に収まっていく感じがする。千宙は、買い物籠を手にとると迷う事なく猫コーナーに足早に移動した。食い気の恐ろしい飼い猫は、量も質も拘る我が儘王子だ。やっすい缶詰には見向きもしない。不経済甚だしい限りだ。

お気に入り数種に試した事のない商品を籠に入れる。重い。

小さい頃から食べているカリカリの袋に手をかけた——その時、小さな仔猫の声が聞こえた気がした。

ペットショップなのだから聞こえてもおかしくない。

だけど、何か違和感が、と猫コーナーから半身出しキョロキョロと辺りを見回してみた。

ドキンと心臓が跳ねた。

絶句もするつてもんだらう。

千宙の目に飛び込んできたのは、先程まで文子と共に話題に上がっていた人物が店先に立っていたからだ。

——せせせせ瀬木先輩^{せき}ツツ!?

なにが起きているのか意味が分からない。なぜ秋陽^{あきひ}がここにいるのかが分からない。

千宙は、そつと物陰に身を寄せながら、秋陽の様子を眺めた。彼のイメージから掛け離れた場所だ。

そもそも人間らしい事が何となく似合わない男だからだろう。それ故に、興味が湧くつてもものだ。

秋陽は、視線をゆっくり店内を見回した。一瞬だけ、千宙と視線が合った気がしたが、秋陽の視線が止まったのは、彼に見惚れていた数名の定員の前だった。

秋陽は、スタスタと店員の元へ行くと片手に大事そうに包んでいたモノを店員に見せている。

なんだろうかと無意識に少し身を乗り出したが、なにを抱えているのか分からなかった。

だが、それはすぐに解決する事になる。
思いの外、店員の声が大きかったからだ。

「仔猫じゃないですかー」

「わあ、ちっちゃーい！あ、でも、目は開いてるう」

仔猫。どうやら、秋陽は仔猫を連れているらしい。

ニコニコと秋陽に話しかける店員たち。

「さつき、見付けたんだけど、世話の仕方が分からないんだよね。教えてくれる？」

「え…えー、私分かんない。なつち分かる？」

「世話した事ないよー。こんな小さい子、専門家じゃないと育たないと思うしい」

仔猫の生死を左右する会話と思えない会話に、猫好きである千宙はイラッとした。

こんな事なら、ペットショップより動物病院に相談した方が確実じゃないかと思うのだが、秋陽にそんな発想はないらしい。本当に無縁なんだな、と思う。

「可哀想だけど、目が開いたとこの子は難しいと思うのー」

――生死の前に、良い男の前だからって語尾に媚を含ませ

るな！あんたら、私がレジ頼む時、無表情で素っ気ないだろーが！
そもそも、あんたら犬をトリミングしてるとこ見たぞ。と、いう事は80%は確実に専門行つて、基礎知識とか勉強してんだろーがッ！

千宙は、拳をプルプルと振るわせる。

まだ、自分の方が知識がある、と言える。もっと大きかったが、ペペをミルクから育て上げた経験もある。

店員の目が開いている、瀬木の手のサイズの情報から察すると生後15日程度だろうか。

お手伝い出来るなら協力したい。

だが、彼の視界に入るのが恐ろしい。自分の姿を認識されたくない。

だけど――成長出来る可能性があるなら、そんな事はどうでもいい事ではないか？

その内なる葛藤の中、秋陽の一言が千宙の行動を決めた。

「頑張つてる子を死なせたくないな……」

優しい言葉。命の大事さを知っている人だ。千宙は勢い良く踏み出したが、緊張のあまり足が震える。それを叱咤して秋陽の背後に近付いた。

深呼吸を数回こなし、声が震えないように注意しながら声をかける。

「あの！話が聞こえたんですけど、ちょっと仔猫見せてもらっても良いですか？」

第一声が、大きくなったのはご愛嬌だ。

突然の千宙の登場に驚いた様子の店員とは裏腹に、秋陽は身体ごと振り返り、手の中の仔猫をみせてくれた。

仔猫は本当に小さくて予想通り生後15日前後ほどの様に見える。力強く鳴き声を上げている様子から元気は良さそうだ。真っ白の身体に手先だけが黒い。逆バージョンの靴下猫だ。

「可愛い・・・」

「ん、可愛いよね」

生かせてあげたい――

それからの行動は早かった。

まずは、猫コーナーに向かい、栄養素が1番良いミルク缶を選び、その横にある哺乳瓶を掴む。そして、ペット用毛布を手に掴むと秋陽たちの元へ戻った。

まだ、支払っていなかったが、それらの封を切ると説明書を読みながら哺乳瓶にミルクの粉を入れた。

「あの店員さん、このスプーン4杯分のお湯を淹れて貰えますか？」

千宙の行動に啞然としていた店員もずっと出された哺乳瓶を受け取ると慌てて休憩室へ引つ込んでいった。すぐに戻ってきた店員からお湯の入った哺乳瓶を受け取ると、蓋をきつく閉めてガシャガシャと振る。混ざったのを確認しながらミルクを適温に冷やす。手の中ですぐ温度を確かめて納得すると、制服が汚れるのを気にする事なく床に腰を下ろした。胡坐を掻いた足の上に毛布を載せると、秋陽を見やった。

「瀬木先輩、仔猫良いですか？」

千宙は手を伸ばして受け取ろうとしたが、その前に秋陽は千宙と同じように床に座り、優しく仔猫を毛布の上へと下ろした。

「ありがとうございます」

千宙は、仔猫を片手で支えて哺乳瓶を仔猫に近付けける。ミルクの臭いに反応した仔猫は鳴きながらも勢い良く齧^{かぶ}り付いてミルクを吸い始めた。

「飲んだ、良かった。自力で飲めるなら大丈夫かもです」

「経験ある？」

「うちの子もミルクで育てたので・・・」

「凄い勢いで飲んでる」

「お腹空いてたんですね…も、カラだ」

ミルクを飲み終わった仔猫のお腹がポツコリなっている様子が秋陽の表情が綻ぶ。それを見た千宙の顔も自然と綻んだ。

千宙は、哺乳瓶を床に置くとポケットの中からティッシュを取り出した。

「世話するにあたって大事な事なんですけど、この頃はまだ、自身で排泄出来ないんです。だから、ミルク飲んだ後とかに促してあげないと駄目なんです」

そう言つと、ティッシュを軽く丸めて仔猫に刺激を与える。
すぐに排泄を確認した。

先程からの千宙のテキパキとした動きに店員たちも感心したように感嘆している。

「で、あの…この子、生後15日前後だと思います。1ヶ月半くらいまでは2〜3時間ごとにミルクとトイレの世話が必要です。後は少しずつミルクの時間を変更して力リ力リに以降して行ったら良いと思いますが…1度、動物病院への相談をオススメします。後は、深めの段ボールに毛布を敷いた中に寝かせてあげてください。寒がるようなら、ペットボトルにお湯を淹れた物をタオルで巻いて段ボールに入れておくの良いですよ」

「大変だね」

「大変だけど、してあげないと赤ちゃんだから」
「だね」

千宙は、排泄を終らせた仔猫を秋陽に戻して立ち上がると、ミルク缶や哺乳瓶、タオルに買う予定だった缶詰たちをレジに乗せた。

「お会計お願いします」

「あ、はい」

ピピとレジ音を鳴らして合計を出していく。財布の中身を確認めて、何とか持っているお金で足りるとホッとした所に財布を押さえられ阻止される。

秋陽だ。

「お礼。奢るよ」

「え、いや、でも…」

「ここは俺に出させて——で、もし、良かったら——」

「携帯番号教えて」

【4】仔猫の名前

ブブブ・・・ブブ・・・ブブブ。

ベッドに転がしていた携帯電話が鳴った。

千宙^{ちひろ}は、ダイブする勢いで携帯に飛び付き、相手確かめた。スプリングが必要以上に弾んだが、その所はバネの強度に感謝だ。表示されている『瀬木秋陽^{せきあきひ}』の文字にドキンッと心臓が高鳴る。あまりの跳ねように心臓が止まってしまうんじゃないかと心配するが、そんな事よりも高揚感が増す。

—— ホントに来た！マジで来た！これは、夢なのか？うおお、おお、マジでか。

あの後——なぜ、携帯電話？と疑問符と間近で見る秋陽のカッコ良さにプチパニックに陥りかけていた千宙は、カタカタと油切れのロボットの如く携帯電話をポケットから取り出すと電池切れの様に固まってしまった。その後の行動をどうすれば良いのかが分からなかったからだ。

だが秋陽は、それを気にする事もなく千宙から携帯を取ると赤外線でお互いのアドレスをスムーズに交換し、「はい」と千宙に手渡して、「後でメールする」と告げた。

突然過ぎた展開に千宙は追い付けず舞い上がり気味に上擦った返事しか出なかった。

そんなこんなで知り得た秋陽のメールに動悸を感じながらフルフルと震える手でメールを開いた。

『こんな感じで大丈夫？さつき、ミルクとトイレが終ったところ』

そんな、文面と共に一枚の写真が添え付けされていた。四角型のペット用キャリーバッグだろう入れ物にフワフワの毛布が敷き詰められ、その中心に仔猫が寝ている。真上から撮った写真では仔猫の顔を窺う事は出来ないが、両手足を伸ばしている様は愛らしい限りだ。

絵文字も使われていない簡素なメールだが、親しい友人に送るような様な軽い文面に千宙は、歓喜に身悶えさせながら返信ボタンを押した。

『完璧なベッドです。猫ちゃん気持ち良さそうぐ（・・）ノ
ミルクとトイレは上手く出来ましたか？』

この1回でメールを終らせるなんて勿体ない！とばかりに疑問符のメールを作成し、フーフーと息を吐きながら送信ボタンを押した。「うひゃ、送っちゃったよ、おい！」

無駄にデカい独り言を漏らしベッドに顔を埋めた。もう、なんだか変に高いテンションに変態になった気分だ。

「来るかな、来るかな…あゝ心臓止まる」

別世界の人だと思っていた、否、今でもそう思っている。

この奇跡の時間はそんなに長く続くはずはない——もし、自分が、細くて可愛い女の子なら、これがきつかけに何かが変わったりするのだろうか、フと奥底にある冷静な自分が、この状況は一時ひたひたの夢なのだと言っている。

舞い上がり過ぎるな。後で、恥を搔く事になるのは見えている。分かっている。だけど、一時の夢でも良い。見て満足していただけの存在の人と同じ時間を過ごしたという事実は残るのだ。その時、秋陽にとつて、良いとは言わないが悪い思い出にさえなっていないければ、それで十分だ。

ブブ・・・ブブブブ・・・ブブブブ。

5分もしない内に返信が届いた。

『問題なし。良い子にしてる。なにか良い名前ない?』

——それは、私が決めても良いって事ですか？

胸に何とも言えないものが込み上げてきた。嬉しい。こんなに胸が躍った事はいつ振りぐらいだろう。

千宙は、ちょっとだけ思案した後、直ぐに返信を押した。

大役を仰せ付かったのだから、良い名前を付けなくては…多分、5月生まれだろう仔猫の顔を思い出す。確か、女の子だったはずだ。だったら、

『マーヤはいかがでしょう?確か、ラテン語で5月を指す女神の名前です。仔猫ちゃん、5月生まれだから、どうかなって。可愛いし、(〃、〃)ノどうですか?』

元々、千宙は絵文字が苦手だ。デコメを操る友人を尊敬するくらい苦手だ。最低限の絵文字に、物足りなさを感じたが、苦手なものはしょうがない。

しかも、馴れ馴れしい気がしてきた?

自分が作成した文章を読み返して、ちょっと引く。実際の千宙は、口下手だが、メールではお喋りになる。人を目の前にしないだけ、色々と余裕が持てるのだ。

うーんと思案したが、これ以上の文面が思い付けず、えいや!と思いついて送信を押した。

送ってしまった後に、何とも言えない後悔がじわりと襲ってきた

が、送ってしまった後では、後の祭りというものだ。

千宙は、ソワソワと携帯を気になった。気を悪くして返信が来なかったらどうしよう・・・そんな事を考えている内に、それを裏切るように携帯が鳴った。

ブブブ・・・ブブ・・・ブブブ。

『良いんじゃない？可愛いと思う。じゃあ、それで決まり』

—— やった！

秋陽の返事にほっと胸を下ろした。

気に入ってもらえたうえに、提案した名前が採用されるなんて嬉し過ぎる。

自然になる笑顔に気付く事なく、千宙は何度かメールのやり取りを繰り返した——

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5418h/>

好きということ

2010年10月15日00時39分発行